

外国語科目「日本語」と日本語教員課程

国際関係学科 東 弘子

本報告では、外国語科目としての「日本語」の開講状況と課題を記すとともに、本年度実施した「国際大学交流セミナー」の学生アシスタントの実績から、今後の留学生教育と日本語教員課程の関係づけの可能性についても述べる。

1. 外国語科目「日本語」の現状

2011年度の「日本語」クラスは、昨年度後期に引き続き11コマの開講であった。うち5コマは他の外国語科目と同様に、学部学生対象のもので、日本語 I、II を各2コマ、III を1コマ、それぞれ通常の外国語科目の時間帯に配している。学部留学生対象のクラスは全て上級または超級である。その他は、特別聴講学生(交換留学制度などにより来日している1年未満の短期在籍期間の留学生)を対象としたクラスで、初級2コマ、中上級2コマ、初級～中上級2コマの計6コマのクラスを、履修時間帯が重ならないように配している。

開講状況は次ページの<表>の通りである。網掛け部分が、正規の学部留学生対象のクラスである。なお、この表の中の「日本事情(社会):旧」は、旧カリキュラムの履修対象者が既に行っていないことから、特別聴講学生用に内容を変更し援用したものである。新カリキュラムでの学部留学生対象の日本事情に対応する科目は、別途設けられている(「日本の文化」「日本の社会」「多文化社会に於けるコミュニケーション」「コミュニティにおけるコミュニケーション」)が、この表では割愛した。

毎回の授業の状況については、日本語クラス担当の非常勤講師8名、日本語教育を専門とする宮谷教員、本稿を執筆しているコーディネイト教員の東、さらに後期からは国際交流室長として着任した桑村教員も加わり11名の間で、メールで授業報告を相互におこない、情報共有をはかっている。こうした情報共有は10年以上継続しておこなっている。

学部留学生は現在、全学で1年生8名、2年生8名、3年生7名が在籍している。「日本語」は、それぞれの所属学部の必修単位である全学外国語科目として履修される。学部留学生全員が日本語を履修するわけではなく、1年生8名がIを、2年生4名がIIを、3年生5名がIIIを履修している(I、IIについては各2コマ開講しているが、いずれか一方のみ履修する学生もいる)。

授業内容はいずれもアクティビティ重視のライティングやプレゼンテーションで、課題や宿題も多く、クラス全体で発表しあい意見交換を行う形式の授業である。それぞれのクラスで時事的な話題もふんだんに盛り込み、母語話者である日本人の学生が参加しても十分に勉強になるような、充実した内容となっている。学生から出される意見がそれぞれの文化背景に基づくこともあり、異文化コミュニケーション力も育成される場となっている。

特別聴講学生は、協定大学の増加に伴い昨年度の後期に急増したものの、大震災や原発事故の影響などにより、本年度前期に予定を早めて帰国した学生もおり、前期は8名に減ったが、後期になってメンバーが入れ替わり現在12名(ドイツ4名、フランス2名、韓国6名)である。例年通り、10月、履修登録の前にプレースメントテストを行い、その結果から適切なクラスを勧

めた。学生はメイト学生や国際交流室の担当者と相談の上、履修するクラスを決めた。特別聴講学生の中で、日本語が上級である学生は、学部留学生対象のクラスも履修している。

また、正規の履修ではないが、日本語クラスの受講を希望する研究生の留学生も、プレイメントテストを受けた上で授業に参加している。他に、日本語学習を希望する英語ネイティブ教員が後期から、日本語 III(3年生対象のもっとも難度の高い上級クラス)に参加し、学生へも大きな刺激となった。各授業の学生数は以下の通りである。

<表>2011 年度後期 「日本語」クラスの内容と履修状況 学生欄の「学」は学部生、「特」は特別聴講学生、「研」は研究生

		月	火	水	木	金
1	科目名	日本語 I a			日本語 II a	
	レベル	学部 1 年生			学部 2 年生	
	内容	アカデミックプレゼンテーション 1			アカデミックライティング 2	
	学生	学:7 名, 特:5 名, 研:2 名			学:4 名, 研:3 名	
	担当者	中道一世			石川美紀子	
2	科目名	日本語 II a	日本語 II c		日本語 I a	日本語 II b
	レベル	学部 2 年生	中・上級		学部 1 年生	初級
	内容	アカデミックプレゼンテーション 2	読解		アカデミックライティング 1	会話・作文
	学生	学:2 名, 特:2 名	特:8 名, 研:2 名		学:8 名, 特:5 名	特:5 名, 研:3 名
	担当者	中道一世	馬場典子		石川美紀子	米勢治子
3	科目名		日本語 I c		日本語 III a	
	レベル		初級～中上級		学部 3 年生	
	内容		作文		読解/表現	
	学生		特:11 名, 研:3 名		学:5 名, 特:5 名, その他(外国人教員):1 名	
	担当者		加藤淳		黒野敦子	
4	科目名	日本語 I b	日本語 III c			日本事情(社会):旧
	レベル	初級	中・上級			初中級
	内容	語彙	テーマによる発表とプロジェクトワーク			日本事情社会
	学生	特:3 名, 研:3 名	特:10 名, 研:1 名			特:11 名
	担当者	山口和代	横内美保子			中道一世
5	科目名		日本語 III b			
	レベル		初級～中上級			
	内容		文法			
	学生		特:10 名, 研:1 名			
	担当者		加藤淳			

2. 「日本語」授業における課題

担当者ミーティングやメールの報告文から、日本語クラスの運営における問題点を記す。

学部留学生対象のクラスでは、学生の学習意欲は大変高く、また、学部を超えて学内の学生が集える場として、活気がありよい学習環境で運営されている。

しかし、一方で特別聴講学生と研究生の履修については、さまざまな問題がある。

まず、本学が、特別聴講学生に対して、1年間(または半年間)の留学プログラムをはっきりと提示できていない点である。これまで、特別聴講学生が来日するのに合わせて、少しずつ初中級レベルの日本語クラスを、正規の授業名を利用しレベル別にクラス分割するといった方法で便宜的に提供してきたが、こうした場当たりの対応では、留学生受入の中で問題が生じてしまう。現状でも、さしあたり、プレイスメントテストの結果に応じてレベル別に配したクラスの履修を勧めているものの、友人との関係や、帰国後に読み替える単位がなく単位が必要でないと判断する学生が、指導に従わなかったり、履修登録しても授業への参加が気まぐれな状況だったりするといった現状が、一部の学生にみられる。指導の責任主体がこれまで明確でなかったが、今後は本年度後期にオープンした国際交流室を中心に、留学してくる以上きちんと用意された授業で成績の獲得を義務とすることを指導する体制作りが、急務であると考え。今後は、義務的に履修する科目と自由に履修できる科目とを分けて提示する必要がある。

また、研究生についても、授業参加状況にかなりむらがあり、担当教員からは、参加する以上、正規の履修学生に迷惑をかけないよう、同じように課題に取り組み、真剣に参加してほしいといった強い希望が出ている。研究生は、履修登録はできないが、担当教員の許可を得て授業へ参加するものである。多くが大学院進学をめざしており、レベル的には学部留学生と同程度であることが望ましいが、実際には、それ以下のレベルのことが多く、短期の特別聴講学生とともに勉強をし、その中で研究計画に関係する作文の課題などを課すなど、担当教員が工夫をして指導をしている。にもかかわらず、自己都合での無断欠席や入試準備があるからと途中で参加をやめる、などといった行動が目立つ。他の学生への影響も鑑み、来年度からは、授業参加の許可を出す際に、授業担当教員からも研究生を受け入れた指導教員からも、参加ルール指導を徹底するようにしたいと考えている。

3. 「日本語」の運営と日本語教員課程

以上のように、本学ではさまざまな「日本語」クラスが開かれているが、こうした授業の中で、一般の日本人学生が関わる場は少なかった(これまで日本文化体験を実施する際に、合同授業をおこなって交流する程度であった)。しかし、本誌の実践報告にあるように、本年度「国際大学交流セミナー」の実施の中で、短期集中の日本語講座があり、その際、日本語教員課程を履修している学生を中心にアシスタント学生として配したことで、留学生のみならず、本学の学生にとっても大きな刺激となり、学習効果があった。それを踏まえ、セミナーでアシスタントをした学生のうちの一人が、後期から日本語 IIIc(火曜4限)のクラスで SA となり、プロジェクトワークの運営に積極的に関わり、よりよい授業運営をすることができた。

本学の日本語教員課程では、主として地域日本語教室や地域の学校などで実習の授業実践を行ってきたが、今後は日本語の授業も含め、学内の留学生との交流を通して、日本語教員課程における日本語教育の学習も、発展していく可能性があると考えているところである。